批評と紹介

佟冬 主編
中国東北史 全六巻

山根 幸夫

本書は先史時代から現代に至る東北地区の歴史を、比較的詳細に、系統的に述べた「地方通史」である。四、五〇万年前の廟后山人の時期から、一九四九年の中華人民共和国の成立までの東北史を述べている。佟冬氏を総主編者として、多数の研究者が執筆に参加している。

第一巻は原始時代から魏晋南北朝までの東北史を述べる。本巻の主編の叢佩遠氏の他、四人の研究者が執筆し、六七六頁にのぼる。本巻だけは一九八七年に一旦刊行されたが、第二巻以下は種々の事情で出版できず、今回全六巻が一斉に刊行されたわけである。

第二巻は、隋唐から遼金時代までを叙述し、孫玉良・趙鳴岐両氏が執筆、全体で八一九頁である。第三、第四巻は叢佩遠氏がひとりで執筆し、両巻をあわせると一九〇四頁の大冊である。第三巻には元代東北篇、明代東北篇を収め、第四巻には明代東北篇（続）、清代東北篇を収めている。

第五巻は楊暘、霍燎原両氏の主編にかかり、執筆者は楊氏の他、九人である。その内容は阿片戦争以降、民国初期までの東北の発展を述べる。七六七頁。第六巻は劉信君、霍燎原両氏の主編で、執筆者は劉、霍両氏の他、六氏が加わっている。その内容は五四時期から中華人民共和国の成立に至る東北の推移を述べている。九七二頁。六巻あわせると五千頁をこす厖大な量である。

次に各巻の内容目次を紹介すると、左の如くである。括弧内は執筆者。

第一巻

第一章　原始時代東北の古人類及びその文化（叢佩遠・黄中業）
第二章　夏商周時代東北の古民族と青銅文化（同前）
第三章　燕秦の東北南部に対する統轄と社会経済の発展（同前）
第四章　両漢時代東北地区社会の発展（叢佩遠・崔国璽）
第五章　魏晋の東北に対する短期統一と北朝時期の割拠政権（叢佩遠）
第六章　高句麗政権の建立及びその逐漸強盛（孫玉良）

第二巻

第一章　隋唐東北地区に対する全面開発（孫玉良）
第二章　唐朝の渤海王国（同前）
第三章　契丹族の興起と遼の東北に対する統治（趙鳴起）
第四章　女真族の興起と金の東北に対する統治（同前）

第三巻　元代東北、明代東北（叢佩遠）

第一章　元王朝の遼陽行省に対する統轄管理
第二章　遼陽行省域内の少数民族の変化と分布
第三章　農牧漁猟及び手工業の発展
第四章　統治階級の内部矛盾と人民反抗闘争
第五章　元代東北の文化風習と宗教
第六章　明王朝の東北地区に対する統一と管轄
第七章　蒙古・女真・朝鮮等の民族の遷徙と分布
第八章　後金（清）の統一戦争と八旗制度
第九章　明代東北地区各民族人民反抗闘争

第四巻　明代東北、清代東北（叢佩遠）

第一〇章　明代東北地区各民族の経済発展
第一一章　各民族の文化風習
第一二章　清王朝の東北地区に対する統轄管理
第一三章　辺疆地区の各少数民族
第一四章　農業発展及び牧畜・狩猟・採集経済概況
第一五章　手工業生産と商業貿易
第一六章　文化教育事業の発展
第一七章　各民族の習俗と宗教

第五巻

第一章　両次阿片戦争期間の東北（欒　凡）
第二章　東北農民起義と東三省軍政制度改革（敬知本）
第三章　清廷の東北における辺防強化と洋務興弁（田　陽）
第四章　甲午戦前の東北経済の初歩的発展（梁志忠）
第五章　中日甲午戦争と東北人民の抗日闘争（劉信君）
第六章　俄国の東北における中東鉄路強修（黄松筠）
第七章　風雲湧起の反洋教闘争と義和団運動（張璇如・敬知本）
第八章　日俄戦争と東北人民の反侵略闘争（楊　暘）
第九章　日俄の東北爪分と殖民拡張（同前）
第一〇章　清末東北経済の一歩進展（梁志忠）
第一一章　東北における辛亥革命運動（楊雨舒）
第一二章　日俄等各国の民族関係挑発と東北侵略強化（楊暘）
第一三章　奉天系軍閥の形成（劉信君）
第一四章　民初の経済発展と無産階級の成長（梁志忠）
第一五章　近代東北城市の興起と旧城の演変（楊雨舒・遅力）
第一六章　近代東北文化の発展（楊　暘）

第六巻

第一章　五四運動時期の東北（霍燎原）
第二章　奉天系軍閥勢力の拡張（畢万聞）
第三章　奉天系軍閥統治の危機（同前）
第四章　張学良主政時期の東北（同前）
第五章　奉天系軍閥統治時期の経済（霍燎原）
第六章　奉天系軍閥統治時期の文化教育（范寿琨）
第七章　九一八事変、日本殖民政権の建立（王慶祥）
第八章　日本の東北に対するファッショ統治と鎮圧（霍燎原）
第九章　日本の東北経済に対する統制と掠奪（鄭　敏）
第一〇章　日本の東北移民と対蘇作戦準備（同前）
第一一章　日本の殖民統治下の文化専制と奴隷化教育（王慶祥）
第一二章　東北人民抗日闘争の発展（孫継英）
第一三章　日本ファッショ統治の末路（王慶祥）
第一四章　抗戦勝利後の形勢と国共両党の東北争奪（劉信君）
第一五章　共産党の鞏固な東北根拠地創建（同前）
第一六章　占領区における国民党統治の確立（同前）
第一七章　東北国共実力の消長（同前）
第一八章　遼瀋戦役と東北解放（崔国璽）
第一九章　東北解放区の和平建設と全国解放闘争支援（同前）

×　×　×　×　×

最初、本書編纂を企画したのは東北文史研究所の設立を提唱した佟冬であり、まもなく吉林省社会科学院に引きつがれた。佟冬の主持の下に、叢佩遠、趙鳴岐、孫玉良、崔国璽、黄中業の五人がその衝に当った。一九六〇年代から七〇年代中期に編修工作を進めたが、諸種の事情で中絶した。八〇年代の初め、三たび中国東北史編修の工作が始まり、吉林省社会科学院歴史研究所の総力を結集して編修を進めた。その結果、一九八七年七月に第一巻が刊行された。今回の第一巻はその再版である（ただし、巻首の図版は除かれている）。

その後、経費不足などの事情によって、残り五巻の編修は中絶していたが、一九九三年、吉林省より資金を交付され、六年を経過して、ようやく残りの五巻を完成、昨年全巻が出版されたわけである。本書編修が企画された一九六〇年代から数えれば、三〇余年を経て完成したことになる。

第一巻の冒頭に掲げられた「前言」によれば、八〇年、九〇年代以来、東北史研究は活発になり、研究者の層も厚くなり、多角度から研究するようになった。文献整理、考古発掘、民族調査の各方面にまで十分な成果をあげた。こ

の基礎の上に、『中国東北史』編写組は、唯物史観によって、系統的に東北社会の発展法則と地方的特徴を深く研究し、東北史と全国史との共通性と不可分性を探究、進んで東北史の全貌を描きだしたという。なお、本書では次の八点について、一定の見方を提示したという。

(一) 中国東北についての地理的区域。
(二) 少数民族に関する問題。
(三) 社会性質と社会分期について。
(四) 東北史と全国史に関する内在的関連性と共通性。
(五) 東北史の地方的特徴。
(六) 東北に関する歴史と文化。
(七) 近代において東北が封建社会から漸次半封建・半殖民地社会に進み、更に殖民地社会に化した期間の帝国主義の東北に対する争奪と人民の反帝闘争の両条の路線。
(八) 東北の重要な歴史地位。

なお、これらの点については、本書を通読して判断していただくしかあるまい。簡単に筆者が述べることのできる問題ではない。

次に、各巻の要点を紹介すると、まず第一巻では東北における母系制社会および原始文化の発展を詳述する。続いて夏商周時代になると、奴隷制社会に移行し青銅文化が成長したことを強調している。燕（戦国）秦が東北南部に対して統治を拡大したことを述べるとともに、当時の東北社会では封建制、奴隷制と氏族制が併存していたと指摘する。また、商業の発展に伴ない城鎮が興起したとするが、この点については誇張も感じられる。更に両漢時代になると、中原勢力が拡大して郡県制が施行される一方、濊貊各部が発展して夫余国が建立されたこと、烏桓、鮮卑が南下してきたことを指摘する。次の魏晋および北朝時代になると、烏桓、鮮卑両部の消長と中原勢力の伸張について述べるが、これに対して「人民反抗闘争」が起ったとする。なお、各時期とも社会経済の発展および文化の状況に論及している。最後に、濊貊部の後裔が高句麗政権を建立したこと、広開土王の武功、長寿王の平壌遷都について述べるとともに、高句麗の社会、経済・文化を紹介している。以上のように、叙述対象は原始時代から北朝期に及び、そこに登場する民族も余りに多数にのぼるので、読者は多少当惑するかも知れない。

第二巻は、中国側では隋唐両朝、東北では渤海国、契丹族、女真族について述べており、執筆者は孫玉良、趙鳴岐の両氏で、叙述はきわめてすっきりしている。最初に隋唐両期の東北地区に対する開発について述べ、各都督府を設置した事情、各少数民族（靺鞨・契丹・奚・室韋など）の

社会発展、および経済・文化の発展を論じている。次には専ら渤海王国について述べる。大祚栄以下、第一五世の大諲譔までの世系を紹介するとともに、渤海国の領域と統治体系、兵制、社会機構などについて述べ、続いて社会経済に及んでいる。更に渤海と日本との関係について、経済交流、文化交流を論じている。最後に、渤海文化に関して、城市建築・言語文学・絵画彫刻・音楽舞踊・儒学・仏教を紹介する。渤海国に関する叙述に、相当重点をおいているように見える。

更に、契丹族の興起と彼らの建てた遼朝の東北統治について論ずる。まず契丹族の早期発展を叙述した後、耶律氏の阿保機による建国と統一と、その遼東占領、渤海を亡ぼし東丹国を建置した経緯を述べる。更に遼朝の政治体制とその東北地区に対する管轄に言及し、その経済発展に及んでいる。続いて民族関係にふれ、遼朝の民族政策と民族遷徙に及び、特に女真諸部に対する管轄の実情を説明している。遼末になると渤海の遺裔をはじめ、各族人民の反遼闘争が発生したことを強調する。最後に、女真族について述べている。まず生女真の社会発展から説き起こし、生女真の部落連盟が形成されて、次第に政治権力に発展していくが、遼朝の支配をはねのけて、女真政権を建立したのは阿骨打であった。阿骨打は金朝を樹立し、猛安謀克制度によって国力を発展させ、同時に生産力をも発展させた事情を解明している。しかし、金朝末期になると各地に人民反抗闘争が発生して、金朝が崩壊したと論じている。

第三巻は上述したように、叢佩遠氏がひとりで執筆し、元代および明代の東北について述べている。元代については、モンゴル族が興起して、東北に勢力を拡大し、遼陽行省を設置し、路・府・州・県を設置して統治を推進したこと、站赤や水陸交通を整備したことを述べている。続いて、遼東行省内の少数民族の分布の変遷に言及する。殊に女真族・契丹族・高麗族について重点的に述べる。更に東北の農牧漁猟および手工業の発展について論じ、元朝統治階級内部の矛盾、労働人民の苦難の生活と彼らの反抗闘争について述べる。最後に元代東北の文化について、地方教育事業の発展、少数民族の文字、宗教信仰について述べ、キリスト教、回教、シャーマン教にも及んでいる。

次に、明代の東北について、明朝の東北地区に対する統治体制、遼東都司、奴児干都司の設置や辺墻の修築、水陸駅站の設置などを述べる。続いて、蒙古・女真・朝鮮など各族の遷徙と分布状況を述べている。更に女真各部の統一の進展、奴尓哈赤による対明戦争、八旗制度の設立などを論じている。最後に、明代東北各族の人民反抗闘争について、女真族、遼東軍戸、および遼東漢族の闘争を強調する。

第四巻は右に続く叙述で、最初に明代東北各族の経済発展について述べるが、まず軍屯・民田の開発、女真族の農業生産の発展、蒙古族の牧畜、農業の発展を述べ、遼東地区における商品流通の盛況ぶりを論じている。続いて、各族の文化・習俗について述べるが、特に女真文化を強調しており、女真族の八旗学校の設立や女真新文字（満文）の制定、服装・飲食・婚姻・喪葬などに及んでいる。

本巻の後半は、清代の東北地区について述べるが、先ず清朝の盛京地区に対する統治制度を述べ、吉林、黒竜江地区、蒙古東四盟に及び、各地の駅路交通や柳条辺にも言及している。続いて、辺境地区の各少数民族について述べる。以下、農業発展に関連して、一般旗地の開墾、皇荘・王荘・官荘などの設定、人参の採集やその貿易についても述べる。各産業・商業交易については、鉱業、林業や内陸商業交易、沿海各地との海上貿易、朝鮮・日本・露国との辺境貿易にも言及している。文化教育の面では、文化流入と流人文化に関する指摘は興味ぶかい。府州県学と並んで八旗官学が設置されたことは注目すべきであろう。最後に、各族の習俗と宗教について述べている。

第五巻は阿片戦争以降、日本の対華二十一カ条要求に至るまでの時期を、一六章に分けて、一〇人の研究者が執筆している。その間の政治的推移を軸として、それにともなう経済的発展、あるいは人民の抵抗闘争を描きだしている。殊に一九世紀半ばには、露国の侵略に対して中国人民が必死に抵抗したことを強調している。また、日清戦争に際しては、東北軍民が頑強に抵抗したことを述べる。三国干渉後、露国が急速に東北へ侵入、中東鉄路を修築、更に義和団の際には東北を軍事占領し、東北人民がこれに抗争した事実、日露戦争に当っても、反侵略闘争が展開されたことを強調する。辛亥革命後、日本の侵略が激化、二十一カ条要求、西原借款となったこと、奉天軍閥張作霖政権が形成されたことを叙述する。他に東北の経済や文化の発展についても若干言及している。

第六巻は五四運動から始まって、新中国の成立に至るまでの東北史の推移を述べる。殊に九一八事変によって日本の殖民政権「満州国」が樹立され、日本の東北に対するファシズム統治と経済掠奪が強化されたことを強調する。更に、日本は武装移民を送りこんだが、東北人民は激烈な反日闘争を展開し、結局日本の敗戦に至った。その後、東北では国共両党の苛烈な内戦が続いたが、結局遼瀋戦役を機に東北は解放され、新中国成立に至ったことを述べている。

以上、全六巻の内容を簡単に紹介してみたが、六千頁にのぼる大冊であるため、充分に説明しつくすことができなかった。而も、各巻ごとに多少叙述方式の相違もみられる。

例えば、第一巻は主編の叢佩遠氏はじめ、四名で執筆されており、構成もよく整備されている。最後に、高句麗政権の成立とその発展で結んでいる。第二巻は、趙鳴岐、孫玉良両氏で執筆しており、隋唐両朝の東北経営と渤海・契丹・女真のことを述べ、内容的にも非常にすっきりしている。第三、第四巻は叢佩遠氏がひとりで執筆しており、元・明・清代の東北について述べているが、スペースも充分にあったせいか、叙述全体が詳細になり、経済・文化・宗教などにも論及、殊に清代については、農業・牧畜・手工業・商業にまで及び、文化・教育事業や各民族の習俗・宗教にもふれている。これらを一人で叙述しているわけであるから、その労力は大変であったろうが、思いのままに執筆できたのではなかろうか。

問題は第五、第六巻である。第五巻は阿片戦争期から中華民国初期までを扱い、第六巻は五四運動期から新中国の成立に至るまでの東北の諸問題を取りあげている。両巻それぞれ約半世紀を対象としているが、その間の政治変動はあまりにも大きかった。その上で、第五巻は一六章構成で十人の執筆にかかる。各執筆者ともスペースの不足を嘆いたのではあるまいか。筆者が想像するのに、これほど章を細分する必要はなかったのでないか。その方が、全体の叙述がもっとよくまとまったのでないかと思われる。第六巻は一九章構成であるが、執筆者は六人である。やはり、これだけ章を細分化する必要があったのかとの感を深くする。この両巻を通じて痛感することは、日本の東北侵略が非常に強調されていることである。殊に、第六巻では、九一八事変によって日本殖民政権が成立し、東北に対してファッショ統治を展開、経済面でも統制と掠奪を強め、文化専制と奴隷化教育を推進したことを論じている。また、日本の東北移民は対ソ連作戦準備であったことも指摘している。又、両巻を通じて奉天軍閥（張氏）について述べているが、奉天軍閥について一定の評価を与えていることは注目すべきであろう。

本書のような先史時代から現代までの、体系的で詳細な「地方通史」は、中国でも他に例を見ないものである。このような厖大な通史を完成された吉林省社会科学院歴史研究所の努力は高く評価されるべきであろう。本書を基礎として、更に東北史研究が深められることを望む。

（一九九八年八月、東北文史出版社、第一巻、A五判、七〇六頁、第二巻、A五判、八一九頁、第三巻、A五判、九三六頁、第四巻、A5判、九三二頁、第五巻、A五判、七六七頁、第六巻、A5判、九七二頁）